



Title	フィレンツェ発展におけるCarlo I d' Angiòの役割について
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 1, p. 319-350
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79468
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フィレンツェ発展における Carlo I d'Angiò の役割について

米 山 喜 晟

Il ruolo di Carlo I d'Angiò per la prosperità di Firenze nella
seconda metà del Duecento

Y. YONEYAMA

1. Per alcuni studiosi, lo sviluppo rapido della economia fiorentina nella seconda metà del Duecento è spiegabile con il miglioramento della circostanza economica dopo la conquista del regno da Carlo I d'Angiò. L'autore ha già tentato di spiegare il fenomeno con il radicale cambiamento della società fiorentina sotto lo shock della sconfitta di Montaperti. In questo saggio, l'autore tenta di chiarire le situazioni dello sviluppo economico nel tempo di Carlo attraverso le analisi della raccolta di documenti di S. Terlizzi.

2. Attraverso le analisi dei salvacondotti e delle lettere di sicurezza donati dal re ai mercanti toscani, possiamo riconoscere alcune peculiarità dei mercanti fiorentini. Generalmente i loro gruppi erano piccoli (quasi di metà degli altri) e composti principalmente dai parenti. Questo fatto ci insegna il ritardo dello sviluppo economico forse per causa del governo militaristico.

3. Per la preparazione del denaro della guerra di Benevento, i mercanti senesi (specialmente i Bonsignori) mantennero il ruolo più importante fra i mercanti toscani, e anche per il governo del re, i mercanti senesi occupavano i posti più importanti. I Bonsignori, i Salimbene, e i Baccusi (i banchieri lucchesi) trattavano ingente somma di denaro (di riparazioni di Pisa o di Siena, o di gran prestito dal Papato per la guerra di Sicilia ecc.). I banchieri fiorentini occupavano i posti solo secondari e di subappaltatori.

4. Ma rispetto al movimento degli uomini, le situazioni erano completamente diverse. Dalla classe dei laboratori e artigiani alla classe dei professionisti o dei nobili,

tanti uomini vari entrarono nel regno di Carlo. Da principio, i lucchesi avevano le stesse occasioni, e dopo la pace anche per i senesi le porte non erano chiuse, ma cittadini delle altre città toscane non vennero come fiorentini.

5. Così, il cambiamento radicale della società fiorentina era il motivo più importante del movimento vitale dei cittadini fiorentini. La politica di Carlo favorì questo cambiamento e così aiutò lo sviluppo totale di Firenze.

は じ め に

たとえば、Pierre Antonetti は、その著『フィレンツェ史』の中で、「かなり遅くなってから歴史に登場した一都市が、なぜ13世紀末には西ヨーロッパ世界有数の経済的重要都市となりえたのか」¹⁾という問題を、「簡単には答えを見出すことのできないいくつかの問題」²⁾の一つに数えているが、すでに私はこの時代のフィレンツェの変化が単なる経済的發展ではなくて、知的生産性の急上昇を伴った大きな社会変化の結果であるとし、その基となったのはモンタペルティ敗戦による精神的衝撃であることを主張して来た。いわば私は経済發展を社会変化に還元して説明する仮説を立てているのであるが、すでにわが国にはこの時代の経済發展を説明するための定説に近いものが形成されている事実を無視してはアンフェアとなるであろう。

たとえば故清水広一郎氏は、Giovanni Villani について論じた著書の中で、Carlo I d'Angiò について次のように評しておられる。

「年代記におけるヴィッラーニの英雄は、1266年にシチリア王となったシャルル・ダンジューであった。かれの力によってホーエンシュタウフェン家の勢力はイタリア半島から一掃され、この地の政治的重心はフランス王家およびアンジュー家の側に大きく傾くことになった。このような変化をたくみにとらえることによって、フィレンツェの経済的、政治的發展も可能となったのである。商人たちはフランスと教皇庁、それに南イタリアを仲介することで莫大な利益をあげた。」³⁾

あるいは、さらに次のような文章もある。

「(Curradino の処刑で) こうしてイタリア半島の歴史における新しいページが開かれた。政治の重心は決定的にドイツからフランスへと移行した。フランス、アンジュー家、そして教皇庁と結びついたフィレンツェの教皇派にとって、急速な勢力拡大のチャンスが訪れたのである。経済的にも文化的にも、驚くべき発展の道が準備されることになった。」⁴⁾

あるいは斉藤寛海氏は、『史学雑誌』に発表されたその研究ノートの中で、同じ時期についてさらにくわしく同様の説明を加えておられる。

「法王は（周知のように）対皇帝派抗争の援軍として仏王ルイ九世の弟シャルル・ダンジューをイタリアに導入し、同時に、キペルリーナ党支配下のコムーネの商人に対する各国教会の債務取消

を宣告した。同宣告による損害を回避するためにも、大商人は、同様に追放され亡命していたゲルファ党貴族と連帯して（両者の同化が促進された）、シャルルの遠征費用の調達に活躍した。彼らは運命を同遠征に賭けたのである。1266年、同遠征が勝利に終ると、その直後、フィレンツェでは庶民がギベルリーナ貴族を追放した。だが、庶民政権の復活はならなかった。帰国したゲルファ党貴族が、大商人の一部を吸収しつつ、シャルルの騎士団の武力を背景に、政権を掌握したからである（ホーエンシュタウフェン家の報復を恐れた法王の要請で、シャルルは拠点都市フィレンツェの《不在の》ボデスタとなり、そこに騎士団を派遣した）。(中略) ゲルファ党支配下のフィレンツェには未曾有の「エコノミック・ブーム」が訪れ、そのトスカーナにおける覇権が一挙に確立した。シャルルの遠征の成功により、彼および法王とゲルファ同盟を結んでいたフィレンツェは、両者からえた広範な特権を媒介に、経済活動を飛躍的に拡大しえたからである。この時期に、商・金融・工業が三位一体的に結合したフィレンツェ経済の骨格が確立し、また貴族の一部も直接・間接に経済活動に進出した、と思われる。ともあれ、庶民の富と人口とは飛躍的に増大したが、この繁栄の基礎は同同盟にあったので、その直接の担い手たるゲルファ党貴族（大商人の一部を吸収）の支配を、彼らは甘受せざるを得なかった。」⁵⁾

以上お二人の見解は、フランス王子 Carlo I d'Angiò のイタリア＝ナポリ王国征服による権力の重心の移動とそれに伴う経済環境の大巾な変化にフィレンツェの経済的飛躍の原因を求めておられる点で、基本的にはほぼ等しいと見なしうるであろう。従来 Carlo I の評価に関しては、ドイツの学会やシチリアの地方史学には伝統的にこれを否定的に見る傾向が認められ、また Carlo が外国人君主であるという事実から共和主義者の多い知識人の反感を招きやすいためか、その積極的影響はともすれば無視され勝ちで、今日なおまぎれもなくこの時代のフィレンツェ史研究の最大の権威の一人である『フィレンツェ史』の著者 Davidsohn にさえも、そうしたこだわりが多少感じられるというのが実情ではあるまいか。そうした中であって、Carlo I がフィレンツェ発展に与えた貢献を明確に指摘しておられるという点で、前述のお二人の説明は、一見感じられるよりも重要な意味を持っていることを評価すべきだと私は考える。たしかに今引用した説明は、客観的事実に立脚した説得力に富んだものであり、これだけ大きな客観的要因がある以上、フィレンツェの経済的文化的発展は当然の帰結であって、Antonetti や私のようにこと更謎として大げさに取り上げる必要はないとする見解が生じるかも知れない。

前述の文章が発表されたのは、私がモンタペルティ敗戦の結果を重視した説明を発表する⁶⁾以前のことなので、そこには今挙げたような、私の仮説に対する反論は全く含まれていないけれども、それに対する批判が先取りした形で含まれていると見なせなくもないであろう。私自身の仮説は、両氏の御意見と正面から対立するものではなくて、むしろ両氏が指摘された環境変化に逸早く適応しえた要因として、やはりモンタペルティ敗戦の精神的影響を軽視しえないとするものだが、ご両氏の説明で十分説得的だとすれば、私の仮説は不必要だということになるであろう。あらゆる歴史上の事件はすべて関連し合っているので、敗戦の影響が作用しない筈はない以上、私が強弁し続け

ていれば多少はもっともらしい主張が可能だが、その場合第三者が客観的に見れば、私が下らないことを針小棒大的に騒ぎ立てていることが明白になるであろう。だからこの時代に残された様々な資料の中から、お二人の説明で十分であるのか、それとも私のような説明が有効性を持つ可能性が残っているのかを検証して見る必要があると思われる。実は第二次大戦末期、ドイツ軍が撤退する際にアンジョー一家関係の資料を焼却したという事実⁷⁾もあって、この時代に関するアンジョー一家とフィレンツェとの関係を把握するための資料はかなり制限されているということである。幸い Filangieri⁸⁾によって、Carlo I の治世に関してはかなりの復元が行われているので、すでに活字化された資料は量的に決して少くない。しかし今回のような目的のためには、むしろ Terlizzi の『アンジョーの Carlo I とトスカーナの関係に関する資料集 (Documenti delle relazioni tra Carlo I d'Angiò e la Toscana)』⁹⁾の方がより適切であると思われる。少くとも私が索引等から調べた所によると、フィレンツェと Carlo I との関係については、やや主観的な断定を許されるならば、重要な資料はほぼ網羅されている上に、トスカーナ全土との関係を明らかにすることによって、他のトスカーナ都市、ことにシエナやルッカとの差異がはっきりと把握できるからである。勿論いかにくわしい資料集にも限界があり実証的研究はあくまでそうした限界の上に立った、いわば未完成の試みであり、そこから得られる結論もあくまで一つの仮説の域を越えることはないのであるが、今日我々が成しうる検証の方法としては、ある程度の有効性は否定できないのではあるまいか。

第一章 Terlizzi の資料集から見た、Carlo I d'Angiò 当時の フィレンツェ市民の経済活動の特長

第一節 Carlo I がトスカーナ商人に与えた安全通行証 (salvacondotto) および身分保証状 (lettera di sicurtà) より見たフィレンツェ市民の特殊性

Carlo I がフィレンツェ市民（勿論貴族も含めて）や他のトスカーナ諸都市の市民に与えた特権の中で、もっとも具体的な形のものは、自分の領内を自由に通行することを保証する安全通行証と、その身分や財産を保証する安全保証状であるといえるだろう。だからそれらの文書を比較検討すると、案外興味深いこの当時のフィレンツェ市民の特性が窺えるのではないだろうか。

Carlo 王がトスカーナの各市民に与えた安全通行証および安全保証状の中で、今日 Terlizzi の資料集にその写しが残されているのは、前者が51通、後者が5通に過ぎない。

その内最古のものは、まだベネヴェントの戦いが行われていない、それ故 Carlo が南イタリアには何らの実権も有していない1265年7月21日付¹⁾のもので、シエナのグェルフィ党員の不特定多数の人々に対して発行された安全通行証である。シエナというと、フィレンツェをモンタペルティで打破った張本人だから、ピサと並ぶトスカーナのギベッリーニ党の拠点として見なされ勝ちであるが、おそらくこの当時のシエナ市民にとっては迷惑な話だったはずである。第一モンタペルティ戦争当時は、フィレンツェのブリーモ・ボポロ政権自体、グェルフィ党のためにシエナと戦ったわけ

ではなかった。後に見る通り、当時フィレンツェは法王庁と久しく確執を続けていて、聖務停止令さえ受けていた程で、決して法王庁に対して特別忠実な都市などではなかった。モンタベルティ敗戦で追放されたフィレンツェの亡命者の一部が、Manfredi 打倒のためドイツの Corradino の力を借りようとした²⁾という事実一つ取っても、彼らを動かしていたのがゲルフィ党の理念などではなかったことは明白である。彼らが Carlo I を支援したのは、よりベターな可能性がこの時点では見出せなかったからに他ならない。たしかにブリーモ・ポボロは亡命したギベッリーニ貴族を保護しているという理由でシエナ領内に攻め入ったが、それはあくまで市政府に敵対し、それを転覆するおそれのある反逆者を追討するためであり、同時にそうした口実の下で自己の勢力圏や領土を増やすための行動であった。また勢力圏や領地を増やそうとする衝動は、中世イタリアの領域を持った自治都市には本来的とも呼べる程普通に見られるものであった。

またフィレンツェが古来特にゲルフィ色の強い都市だったなどという事実は認められない。Federico II の治世の末ごろに、市から最初に追放されたのは、ゲルフィ党の方だったし、ロンバルディーア同盟の諸都市や、ボローニャのように皇帝勢力と果敢に戦ったということもなく、むしろ皇帝が死ぬ日まで、その息のかかったポデスタが治めていた³⁾という事実などを考慮すると、客観的には久しくギベッリーニ党勢力に抑圧され続けた都市の一つに数えうるのではないだろうか。ただし皇帝が一度も訪問しなかったという事実⁴⁾から、その関係が冷たかったことは認められるだろう。しかしルッカやシエナと違って、古い時代には法王を一人も出さず、枢機卿さえ稀だったという事実を考えると、法王庁との関係もそれ程親密だったとは考え難い。かつて私が述べたように、領域面積はトスカナ第一でも、発展が比較的遅れた平凡なコムーネだったと見なしうるのではないだろうか。しかし領域が広いのと、交通の要衝の平地にあって人口集中が容易なおかげで、軍隊の規模が大きく、周辺のコムーネにとっては脅威であったことは確かである。

一方、シエナの場合は、ローマにより近い点から考えても、本来は法王庁により近かったはずである。かつて Federico I 時代にロンバルディーア同盟の精神的支柱の役割を果たした重要な法王 Alessandro III もこの市の領域の出身⁵⁾だった。そしてシエナの商人たちはフィレンツェ商人よりも先に法王庁に喰い込むことに成功しており、明らかにフィレンツェよりも太いパイプを有していた。だからフィレンツェのギベッリーニ党亡命者を受け入れて、その助言に基づき Manfredi 王の軍隊を借りてフィレンツェ軍を破ったのは、あくまで自国とその領域を守るための窮余の策であった。シエナではようやく1262年に法王 Urbano IV の指導で初めてゲルフィ党が誕生した⁶⁾という事実は、決してそれが強固なギベッリーニ都市だったということの意味しない。ただ強大なフィレンツェとの対抗上ゲルフィ党が生れる余裕が無かっただけなのである。まだゲルフィ党が存在しない都市には、厳密な意味でギベッリーニ党も存在していないのである。1262年法王が債権を無効にするという脅迫で協力を迫った時、シエナで初めて生れたゲルフィ党の二大リーダーの一人となった Noto Salimbene と同じ一族から、二年前のモンタベルティ戦争の際には多額の出資がなされた⁷⁾という記録が残されているが、事実だとしても少しも意外ではない。シエナはイタリアの

中でも傭兵を最も古くから用い始めた都市の一つ⁸⁾であり、Manfredi の軍隊も、あるいはそれ以前に受け入れた Uberti らフィレンツェのギベッリーニの騎士たち自体も、一種の傭兵だと思えなくもないのである。

こうした事情を考慮すると、Carlo I が侵入した後、イタリアに広大なゲルフィ勢力圏が生じたとしても、トスカーナのいずれかの都市に本来的に有利に作用することはありえず、あくまで一時的な成り行きの結果に過ぎなかった。

以下で具体的な数字を眺めよう。

Carlo が与えた Salvacondotto と lettera di sicurtà (*印)
(安全通行証) (安全保証状)

フィレンツェ			ル ッ カ			ピストイア		
番 号	人 数	同一家族のメンバー	番 号	人 数	同一家族のメンバー	番 号	人 数	同一家族のメンバー
4	7	4	51	7	2	55	10	17
5	2	0	325	3	0	56	3	2
8	4	0	計	10	2	57	9	3
9	4	0	(平均)	5	1 (20%)	58	12	6 又は 3
15	2	0				59	13	10
26	6	4	シ エ ナ			60	10	4
64	6	6	番 号	人 数	同一家族のメンバー	61	11	3
65	2	2	1	不特定多数	同 左	260	2	2
66	6	6	3	22	8 又は 6	297	4	4
67	3	2	46	7	3	総 計	74	41
73	7	6	62	9	3	(平均)	8.22	4.56 (55.40%)
76	8	5	71	2	0	ピ サ		
77	2	0	72	1	0	番 号	人 数	同一家族のメンバー
78	1	0	74	6	0	140	5	0 (0%)
108	2	2	75	8	3			
109	2	2	119	4	4			
169	1	0	139	1	0			
170	3	3	141	11	3 又は 2			
174	3	3	307	3	3			
257	1	0	358	22	3 又は 2			
259	2	2	小 計	96	30			
266	4	2	(平均)	8	25 (31.25%)			
274	3	3	132*	19	0			
285	2	0	331*	3	0			
286	2	2	333*	4	2			
296	5	4	747*	7	7			
小 計	90	58	総 計	129	39			
(平均)	3.46	2.23 (64.4 %)	(平均)	8.06	2.43 (30.23%)			
334*	5	0						
総 計	95	58						
(平均)	3.52	2.15 (61.05%)						

たしかに件数が少なすぎるくらいはあるが、都市別にかなり顕著な差異が認められるので、他の資料と併わせて総合的に判断するための有益なヒントを与えてくれるのではないだろうか。

ところで安全通行証については資料8(以下8°と記す)⁹⁾において、安全保障状については132°ではほぼ全文が記されているが、前者の宛名は自分の家族全員、後者では家来と友人全員といった程度の差異がある。前者ではフィレンツェ商人の名前が直ちに羅列されているのに対して、後者は彼らがシエナの忠実なゲルフィ会員であることがやや丁寧に記され、前者では単に商人とその従者や傭兵や馬等が「行き、滞在し、戻る際に (in eundo, morando et redeundo)」¹⁰⁾邪魔をして困らせたり、他人がそうするのを放置したりすることなく、必要に応じて面倒を見てやれと命じているのに対して、後者もほぼ同じことを命じながらもその活動の遂行に協力せよといった形でより具体的かつ綿密に記されているといえる。ただし税金に関しては、所定の通行税 (jure pedagii) は規定通り払わせよと命じている点は共通している。たしかに後者の方が誠意の籠った書き方で記されている上、「完全なる安全保障を与える (plenam securitatem concedimus)」¹¹⁾と明記されている等若干の違いはあるものの、同じように税金を取り立てている点から見て、後者に何らかの特殊な任務が託されているわけではなく、その機能は大差のないものと判断して良さそうである。しかし Terlizzi は両者を区別しているので、先の表でも一応区別しておく。

まず件数は、フィレンツェ市民に対する安全通行証が26、安全保障状は1、シエナ市民に対しては、前者が13件、後者が4件、ピストイア市民に対しては、安全通行証のみ9件、ルッカ市民に対しても同じく2件、ピサ市民に対して同じく1件が Terlizzi の中に収録されている。こうした数字から、フィレンツェ市民は一見優遇されていたようだが、都市の規模を考慮すると、ピストイア市民の方がずっと優遇されていたといえそうである。たとえば Carlo がボッジボンシの砦を攻撃し、予想外の長日時の後にこれを下した後、当時の支配下にあった都市に費用を分担させた時に、フィレンツェには1992リラ、ピストイアに564リラ、ルッカに1416リラ等々の費用を割り当てたが¹²⁾、そうした比率に較べると、ルッカ市民ははるかに冷遇され、ピストイア市民はフィレンツェ市民より好遇されていることになる。だが実際に Carlo の命令や書簡を眺めると、むしろ王はルッカ市民に対してしばしば非常に暖い配慮を示し、ピストイア市民に対してはそうした記録が残されていない。だからわずかな数字からは何も言えないと見るべきである。

面白いことに、そこに記された人名の数を比較すると、事情は一変し、安全通行証だけでもシエナ市民の名の数は96に達し、安全保障状まで加えると129に及ぶのに対して、フィレンツェ市民のそれは、前者のみで90、後者を加えても95、ピストイア市民は前者のみで74、ルッカ市民は同じく10、ピサ市民は5である。勿論これは一件に記された人数の差によるもので、フィレンツェ市民が安全通行証のみで平均人数、3.46、安全保障状を加えて計算しても3.52であるのに対し、シエナでは(不特定多数の1°を除外して計算すると) 8 (安全保障状を加えると7.59)、ピストイアはさらに高く、8.52、ルッカは5、ピサも5という数字が得られる。このようにフィレンツェでは、シエナやピストイアに比して半数以下のグループが一件を形成しているのである。このことは、傭人や家来

に対しても明記された人々と同様の庇護が与えられる点を考慮すると、決して不利なことではないけれども、やはり活動する組織が平均して小さかったということを意味しているといえるのではないだろうか。実際問題として考えて見ると、たとえ家来が主人同様に安全を保証されているとしても、やはりその名前が証書の中で明記されていた方が、その家来のみならず組織にとっても何かと有利な筈である。だから一件ごとの人数が平均的に他の都市の半数であるということは、平均して組織が小さかったと見なしうる手掛かりではないだろうか。

さらにここに家族という要素を加えると、フィレンツェの特殊性は一そう明らかになると思われる。必ずしも常に親子とか兄弟とか甥とか明記されてはいないので、いくらかの誤差が生じる可能性はあるが、苗字などから同族と見なしうる人々の人数を都市別に比較すると、同一証書の中に現われた同じ家族のメンバーの数は、フィレンツェでは安全通行証58 (64.4%), 安全保障状まで加えてもやはり総計58 (61.05%) という高率であるのに対してシエナでは32 (33.3%), 安全保障状を加えても41 (31.78%) とその比率は約半数に下る。ピストイアでは両者の中間で、計41 (55.4%), ルッカでは10 (20%), ピサでは5 (0%) となる。ルッカやピサは少数すぎるので、この際考慮からはずし、前の三都市を比較すると、シエナとフィレンツェでは対照的な性格が認められる。シエナは、約20人の大グループ、10人前後の中グループ、5人以下の小グループのいずれをも含み、同一家族が形成する小グループも多少は含んでいるが、同一組織内の家族の比率が低い。フィレンツェは全部一桁の小グループで、例外的に中グループに近い組織もあるが、同一家族が形成しているグループが極めて多い。ピストイアは中グループが大半を占めるが、同一家族からなる組織がかなり多い。なおフィレンツェではそういう例が見当らぬのだが、ピストイアの場合 56° 以外のすべての安全通行証に、55° 中の「アスタローニ会社の (de Societate Astaloni)」¹³⁾ 等のように会社名が明記されている。

こうした結果から分ることは、まず三市の間にかなり差があることで、しかも三市ともフィレンツェに多い小人数で家族中心の組織が混じっている点から考えて、それらの差は各市における表記法の違いなどでは説明できないことである。要するにその最も素直な解釈に従うならば、シエナで最も大規模な企業組織の発達が見られたのに対して、フィレンツェではまさにこの時期に、家族を核とした小企業が猛烈な活動を開始したのであり、ピストイアは両者の中間の状況にあったと見なしうるのではないだろうか。

こうした解釈に立つならば、Machiavelli の『フィレンツェ史』¹⁴⁾ 以来、現代まで、特に反封建権力闘争の旗手として、多くの知識人の支持と称讃を浴びて来たプリーモ・ボボロが、実際にはフィレンツェの私的な経済活動に対して大きな制約を加え続けて来た可能性が認められるであろう。しばしばその政権が1252年に鑄造し始めたフィオリノ金貨について、当時のフィレンツェの経済発展のシンボルのごとき表現が見られるが、少なくともその成立事情から見るかぎり、むしろ国の権威のシンボルとして誕生した¹⁵⁾ ことは明らかであり、そうした国威発揚的側面が従来余りにも軽視され過ぎているように思われてならない。私的経済の発展が公的な制約によって遅れている国が、

何らかの公的な活動によってその遅れをカバーしようとする例は決して少なくないことを考えると、周辺の城塞をいくつも占領して戦利品には事欠かなかったブリーモ・ポポロが、それらの資財を用いてイタリアでは逸早く金貨を鑄造し、その経済力を誇示しようとして決して意外なことではない。しかし私的な経済活動は、ブリーモ・ポポロが国民皆兵システムを過度に運用して、前例のない仕方でも市民を動員し続けた結果として、順調な発展を妨げられていた可能性は大きい。Villaniらの年代記作者たちが、当時の持参金が小さかったことや、生活が質素であったとしている¹⁶⁾のに対して、普通は当時の質実剛健ぶりの表現だと受け取られ、中にはDavisのように他国の年代記から学んだトボスのごとく見なす学者さえいる¹⁷⁾が、たしかにそういう一面はあるとしても、戦争に明け暮れた結果私的な経済活動が妨げられた、軍国主義的共和国の市民生活の姿と見なす方がはるかに妥当ではあるまいか。結局ここでも伝統的な知識人特有のブリーモ・ポポロ讃美の感情が作用していて、フィオーリーノ金貨鑄造という事実のみでこの時代の経済が順調に発展していたと盲信されているのである。しかし少し冷静に考えると、市民が一丸となって周辺と戦争に明け暮れている都市では、私的な経済活動が阻害されて、その発展が遅れることこそ当然生じる現象である。一時期わが国の知識人の間で圧倒的な影響力を発揮した社会主義神話のごとき霧が、ブリーモ・ポポロ体制に関しても研究者の目をおおっていて、これまで一度もまともにこうした疑問が呈せられたことがなかったように思われる。それはMachiavelli以来傭兵制度が一方向的に悪と見なされ、それが利点を発揮した可能性や、少なくとも全市民を動員する国民皆兵システムよりも有利だった時代があったという見地が、だれからも明確に指摘されなかったのと同様の現象である。しかし実際は、余りにも度重なる動員によって、市民の生活活動の発展は妨害され続け、シエナはおろかピストイアにさえ遅れを取っていたと考えた方がより妥当なのである。

その後のモンタペルティの完敗と、その被害がポポロ階級に集中したという事件は、それまでフィレンツェ市民を一まとめに縛り上げていた束縛を寸断し、一挙に彼らを家本位の経済活動に向かわせた。亡命の有無に拘わらず、敗戦のツケが結局個々の家単位で回ってきたことで、市民共同体の虚しさ、家経済の重要さに目覚めざるを得なかった。彼らがポポロの共同体の理想を棄てて、自分の家の富のことを真剣に考えた瞬間から、フィレンツェの繁栄が始まったのである。Renouardは、中世フィレンツェでは同族が企業内で占める比率が高いことを指摘している¹⁸⁾が、すでに見た数字にもはっきりとそうした傾向が現われている。おそらくそうした特長が生れたのも、それまできびしい統制で公的な団結を強いていたブリーモ・ポポロ時代への反動であり、モンタペルティの敗戦でポポロの野望が粉碎された結果であったと見なしうるのである。

第二節 Carlo I とトスカーナ商人との関係を通して見たフィレンツェの特殊性

次に主としてCarloの財政におけるトスカーナ商人の役割を眺めることから分析を始める。斉藤氏は「シャルルの遠征の成功によって彼および法王とゲルファ同盟を結んでいたフィレンツェは、両者からえた広範な特権を媒介に、経済活動を飛躍的に拡大した」¹⁹⁾と記しておられるが、時間

的にはややずれがあり、Carlo 遠征当時のフィレンツェはギベッリーニ支配下の都市であって、彼を助けたのは亡命中のゲルフィ党と市民であった。またすでに見た通り、シエナからも Urbano IV によって急造されたゲルフィ党員が、すでに約100人亡命して²⁰⁾、Carlo の資金援助にたずさわった。トスカーナの大部分の都市のゲルフィ党員は、フィレンツェの約1500人²¹⁾程多数ではなくとも、すでに亡命して協力したのである。たしかにフィレンツェ亡命者は、協力者中最も多数を占め、一部はベネヴェント戦にも参加して²²⁾その功績は大きい。しかし問題を資金融資に限ると話は少し違う。

Carlo I を最も悩ませたのは資金難であった。彼が危険を冒して、軍隊より先にローマに来て長く滞在したのも、結局は資金調達の便宜を得るためだったらしい。É. G. Léonard はその事情を次のように記している。

「この企ての唯一の資金源だったフランスにおける三年分の教会の十分の一税は、苦勞してもゆっくりとしか回収されなかった。クレメンス四世がルイ九世にその収入の前払いを依頼したが駄目だった。(中略)法王はその企てのために、ゲルフィの銀行家相手に大成功を収めた。彼らはすでにこの作戦と手を結び、ギベッリーニ政府から追放されていたため、徹底的に勝負する大胆さがあった。シエナとフィレンツェの銀行家たちは、何度かにわたって合計20万トゥールーズ・リラを貸しつけた。だがシャルルが、毎日1200トゥールーズ・リラずつ消費したので、クレメンスは9月にさらに10万、12月に5万を借りてやろうと交渉した」²³⁾。Carlo がこの際最も頼りにしたのは、何といてもシエナの銀行家たちの資力であった。当初 Carlo も法王庁も資金の貸し手が見つからなくて大変苦勞したが、やがて非常にたより甲斐のある大きな銀行、すなわち13世紀のロスチャイルド²⁴⁾とも呼ばれるシエナの Bonsignori 銀行がバックアップしてくれたために一挙に事情が好転する。Jordan はそれについて「一つの決して小さいとはいえない銀行が、法王庁の国庫に奉仕していた。Bonaventura di Bernardino と Francesco Guidi の会社 (Bonsignori 銀行) のみで、ベネヴェント合戦以前にシャルル・ダンジューが結んだ借款契約のほとんど半分に応じたのは偶然ではなかった」²⁵⁾とし、従来からの法王庁との関係がその背景にあったことを示す。さらに Jordan は具体的な契約例を列挙しているが、その主なものは、まず前述のシエナ市民 B. d. B らが5月に結んだという 20000 lire tornesi (トゥールーズ・リラこれはフィオーリーノ金貨の2倍の価値ある大型貨幣、2.5分の1 oncia に当る) に始まり、6月にフィレンツェ市民 Teghia di Jacopo della Scala と前述のシエナ市民らによる 2982 lire tornesi、同月のフィレンツェ市民 Riccio di Buonaguida による 4000 lire tornesi、同月シエナ市民 Gregorio di Bernardino による 925 lire tornesi、8月、フィレンツェ市民 Albertino Rota らによる 3000 lire tornesi、12月、法王庁出入りの銀行家たちと、前述のシエナ市民 B. d. B らによる 10500 lire tornesi、さらに例外的に行われた Carlo の兄ボワティエ伯 Alfonse からの援助 4000 銀マルクと 5000 lire tornesi、12月にさらに前述の B. d. B による 50000 lire tornesi、1月、ローマの銀行家たちによる 82000 lire tornesi 等である²⁶⁾。

最近の Housley の著『イタリアにおける十字軍』でも、Carlo のイタリア侵入は一連のイタリア

十字軍の一つに位置づけられ、その資金の流れも大まかに跡付けられているが、その受け入れ時期はこれまで見た通説よりも若干遅れ、Carlo の財政事情が好転したのは1265年の11月～翌2月とされている²⁷⁾。残念ながら取扱い銀行の名は余り明記されていないが、他の著者と同様この著者も Bonsignori 銀行の功績を強調していて、法王 Clemente が「この事業や他の事業および他の我々の必要に際し、常に我々自身と前述の王に気前良かった」²⁸⁾ Bonsignori 社の忠誠を称讃したことを記している。Jordan と Léonard の説に基づきベネヴェント戦争の資金の流れを大まかにまとめると、兄 Alfonse 伯からの援助を除いて唯一の資金源だったフランスの十分の一税を基にして、まずローマ商人による融資2～3万、次にシエナ商人を中心とするグループより20万、法王庁関係の（恐らくローマの）商人より10万、さらに Bonsignori 単独で5万、計約37万 lire tornesi の資金が動いたようだが（重複して記録されているケースもありそうなので実際はそれよりもかなり少ない可能性も否定できない）、その半分弱をシエナの Bonsignori が引受け、他にシエナの Salimbene, Tolomei 等の有力銀行が協力していたことや、ローマやルッカの銀行も協力していたことを考えると、フィレンツェ市民が果していた役割はどの程度だったのかという疑問が残る。勿論ローマの銀行なるものが、実際には法王庁出入りという意味にも取れるけれども、その場合には古くから法王庁に深く喰いこんでいたシエナの占める役割がさらに拡大するであろう。すでに見た Jordan の具体例でも、たしかにフィレンツェ市民は度々現われるが、その金額は決して大きくはなく、シエナ市民の扱い額より一桁低いという事実は否定しえない。いずれにせよ、Bonsignori 社こそこの場合の主役で、Carlo の生命の恩人だったことは明白である。

こうした建国の際の経緯は、Terlizzi の資料集にもはっきりと反映していて、Carlo の王国の財政を牛耳っていたのは、大半の時期は明らかに Bonsignori を中心とするシエナの会社であり、末期にはルッカの Baccusi 社が抬頭しているため、フィレンツェ商人は二番手または三番手の地位を甘んじ続けたという印象が否定し難く感じられる。

具体的に大きなお金の流れを辿ってみよう。

王の財政を日常的な部分と臨時的な部分に大別して眺めると、前者の収入には、租税や債権の取り立て、王の被保護民からの献金（特に王が派遣した軍隊の費用）等があり、支出としては家来や傭い人（特に兵士）の賃金の支払い、負債の返済に加えて、年間 8000 once d'oro の法王庁への納入金があった。

他方臨時の収入としては、戦利品や捕虜の身代金、賠償金、さらにこれは後に返済を要するがシチリア戦争のための法王からの巨額の借款等があり、支出としては、相次ぐ大小様々な戦争の費用や、災害対策等々があった。約20年の統治の間に、ベネヴェント、ターリアコッツォの二大合戦を皮切りに、トスカーナのギベッリーニ都市やジェノヴァとの戦争、チェニスへの十字軍、バルカン半島やギリシャへの進出もしくはその準備、名目上の権利を持つ東ローマ帝国征服準備、シチリア内乱と反抗の試み等々、あくなき野心の結果として戦争が絶え間無く続き、また大がかりな戦争の準備が進められたため、王は常に財政難に苦しみ、一種の自転車操業を強いられ続けた。だから王

の財政は常に臨時的部分を包含し続け、戦時財政の性格が強かった。それ故前述の二種類のお金は完全に複合していて、常に不可分の状態にあった。869°で、Carlo I の長子 Carlo II は、持ち前の几帳面さで財産目録や会計用の帳簿類を家来に点検させ、1283～4年の6ヶ月間に受け取ったお金は、36076 once 15 tari 6.5 grani であるのに対して、支払ったお金は 36076 once 21 tari 14 grani で 6 tari 7.5 grani の出超だと公表している²⁹⁾が、前述のようなあらゆる種類のお金がその中に混入しているのだ。

王はすでに延べたように、自軍の兵士への支払い等を、軍隊を派遣した出先きのコムーネに割り当てようとし、たとえば 431°、432° ではトスカーナに300騎を派遣した後、フィレンツェを始め16のコムーネに対して、その規模に応じてその全費用を分担するように一方的に通告している³⁰⁾が、こうしたやり方がボッジボンシ攻略以来 Carlo のほぼ一貫した方法であったと見なせそうである。これに対してヴォルテッラのような都市は王が押しつけたこういうシステムに対してかなり公然と抵抗し、離脱しようとさえしている (214°、215°) し、シエナ (529°、613°) やルッカ (625°) のように支払いを遅らすことで抵抗している例も見られる³¹⁾が、Carlo は容赦なくそうしたシステムを押しつけている。本来自国民の軍隊で自国の領土と治安を維持していたコムーネに、巨額な費用を出させて外人の軍隊を備わせるというシステムを押しつける際には、当然各コムーネの反発を受けたわけだが、やがてそのシステムは次章で見るようにトスカーナにおける Tallia Militum (同盟軍) としてある程度定着する。こうしたシステムの成立が、市民に及ぼした社会心理学的影響は決して小さくはなかった筈である。だが王が抱える役人や軍隊の費用の大半は、結局王国自体の租税でまかなわなければならない、その不足分を出入り金融業者に借用せざるをえないわけだが、759°や792°における Bonsignori 銀行からの 418 once および 207 once 10 tari の借金は、「我らの傭い人への支払いや、我らの客人のその他の必要のため (tam pro solutione stipendiariorum nostrorum quam pro aliis necessariis hospitii nostri)」³²⁾といった文面より判断して、そうした目的の借金だったことは明白である。

さらに Carlo の平常経費の中で、もう一つ大きな負担となっていたのは、法王庁への年間 8000 once の納付金だったが、少くとも 208°、212° 等から、やはり Bonsignori を通して法王庁に払い込まれていたことが推察される。

これらの資料から判断して、また 273°や406°等で Carlo 王が繰り返し Bonsignori 銀行あてにその時点の支払い金と借金を発表して残高を確認している (他の銀行相手のそうした例はない) 点から考えると、Bonsignori が王のメインバンク的存在だった点に疑いの余地はない。その中に記されている総額は、約 15000 once および 10000 once と共に極めて大きな金額であり、やはりベネヴェントの合戦の際に王を助けたこの銀行の社員 Bonaventura di Bernardino と Francesco Guidi は、その功績によって特権的な地位を与えられていたことが明白である。

ただし Carlo の財政に喰い入っていたのはシエナのこの銀行だけだったわけではなく、たとえば王が王冠や銀器を担保にして借金した相手は、シエナの Salimbene 銀行 (86°) やピストイアの

Gerardini 銀行 (441°)であった。そこにはフィレンツェの銀行は見当らない。

他方戦争の賠償金等臨時的なお金の動きを眺めると、その場合でもフィレンツェ以外の銀行の活躍が顕著である。

たとえば総額が 12000 once に及ぶピサの賠償金の場合、どうやら全体は3分されたらしい。その内3分の1の4000 onceに関して、王はフィレンツェの Frescobaldi, Spiliati, Scala の3社に対し、ピサからその金を受け取り、Bonsignori に払い込むことを命じた (201°~203°)。だが Frescobaldi は、法王庁に censo (貢租) として払い込む予定の賠償金の納付を仲々実行しないため、王から催促されている (212° と 217°)。王は残り 8000 once 中の 3000 once を一度は Salimbene にまかせたが、何かのトラブルで取り消した後 (207°)再び同じ役を Salimbene 社に命じている (233°)。残りについては Bonsignori が委された (200° と 236°)模様で、結局 Bonsignori は直接、間接的に全体の3分の2を扱っているようである。王の命令が錯綜したり、取り消しや復活が重なって必ずしも確信は持ち難いが、注目されるのはフィレンツェの3社が Bonsignori の代りに賠償の一部を取り立て、それを Bonsignori に払い込んでいるという図式である。それはピストイアの Clarenti 社相手に後に現われる (886°)のと似た方式で、やはりこの場合フィレンツェの会社は、Bonsignori の一種の下請けの役割を果たしていると思えるのではないだろうか。これは単に Carlo が恩人の Bonsignori に利権を与えているだけではなく、それらの金が法王庁への censo (貢租) として払い込まれるはずになっている点を考慮すると、場合によっては censo を立て替え払いするだけの財力を持った銀行に担当させようとしたことが考えられる。だから必ずしも単なる恩恵とはいえない。

シエナの賠償金に関しては、王は当面降伏した市から 6000 once, そしてあわよくば亡命したギベッリーニ党からも、帰国の許可と引き換えに 6000 once 得ようと画策する (383°)が、実現したのは前者だけだったらしい。それらは 350° や、424° から、Salimbene がほとんど独占的に関係したらしいと思われる。

もう一つ大きなお金が動いて事件は、勿論シチリア奪回のための戦費で、法王 Martino IV は Carlo を全面的に支援し、王に対して総額 100000 once の借款を認めたとされ (864°), その内の 35000 once (834°)と 15608 once 18 tari 2 grani d'oro (864°)を何故か双方ともルッカの Baccusi 銀行の B. Russilloni や V. Petinati らの手を通して入手している。すなわちこの戦争に関しては、何故か急にルッカの Baccusi 銀行が有利な立場に立ったのである。この時期書類を作製したのは Carlo II とその家来たちだったので、やはり Carlo I から Carlo II へと王室における実務担当者が交代したことが³³⁾、こうした銀行間の競争に影響しているのではないだろうか。王の長子 Carlo II は、Carlo I よりも文官肌で、親子共に君主としては多分例外的に事務能力に恵まれていたようである。とに角、書簡の類を比較すると、この親子はいずれも極めて勤勉に実務に当り、書簡の作製の際には隅々まで目を光らせていたという印象を受ける。彼らは狩りや戦さにだけ熱中するような君主ではなく、財政や行政にも熱心で、担当の家来以上に事情に通じていた可能性が大きい。

勿論シチリア戦争に関して、フィレンツェ商人が関与していないわけではなく、たとえば

Frescobaldi が戦費 1000 onces を納入 (834°) しており、王は同市民 Spiliati に、フィレンツェのグェルフィ党からの献金として納められる予定の 2500 fiorini d'oro (=500 onces) を至急支払えと催促している (884°)。さらに興味深いのは、Carlo I が一度フィレンツェに命じておいた 6 ヶ月にわたる歩兵400の派遣を、6000 fiorini (1200 onces) の金納に切り替えさせている (その理由として「王には金を有する方がより有益だから (quod eidem utilius erat habere pecuniam)³⁴⁾ と記されている) という事実と、しかもこの際王は納付金の徴収をピストイア商人 2 人とフィレンツェ商人 6 人に委せたのち、それらを一括する役割をピストイア商人の Clarenti 社に委せたという事実である (868°)。

これら様々な事例を眺めている内に明らかになることは、やはりフィレンツェ商人の信用の薄さで、たしかに Carlo I は、恩人の Bonsignori に対しても小さな遺産問題の不正を訂したりもしている (548°) ので一がいには言えないにしても、王がフィレンツェ商人に対して支払いを催促したり、求められた支払いを拒否したりする例が特に多いように感じられる。たとえば Carlo は、Frescobaldi から Guido Monfort (トスカーナ代官を務めた王の従弟) に貸した貸金 2000 lire piccole (=300 onces) の返還を求められた時、一度は詐欺扱いにして断った後 (410°)、ようやくおよそ 5 年後にこれを認めて返還を約束している (758°)。また Spiliati に対しては、突然 504 lire tornesi (202 onces) の貸しがあることが判明したので、2 ヶ月以内に返還せよと厳命したりしている (675°)。これは Bonsignori との決算で 263 onces 17 tari の支払い過剰分を、相手に与えた利子や損害賠償と相殺すると申し出ている (406°) のと好対照を成している。勿論双方の事情が違うけれども、フィレンツェの会社に対する王の態度は、かなり厳しく、催促や叱責が多い。あるいはフィレンツェ市民の気風にも関係があるかも知れないが、やはり支払いが遅滞したり、要求が疑わしいとされたりするには、それ相応の客観的状況があったと見なしうるのではないだろうか。そうした状況が生じた原因を考えるならば、結局は全般的なフィレンツェ商人の資金難に帰着するように思われる。やはりそれはポボロが戦争にうつつを抜かしていた十年間における私企業の遅れにつながるのではないか。Machiavelli 以来のプリーモ・ポボロ時代の理想化から解放されれば、これまで見て来たデータはかなり整合的な解釈が可能となるのだが、ポボロという名前に幻惑されて、軍事も経済も一挙に伸びた時代を夢想しているかぎり、フィレンツェ発展の謎は神秘の霧に包まれ続けるばかりである。しかし知識人にとってポボロへの幻想を棄てることが困難なのは、我が国だけに限らず、Machiavelli 以来の人民共和国の幻想は今だに根強く残っている。だが以上のデータを虚心に眺める時、この当時のフィレンツェ商人の姿は、資金難を自らの奔走によって必死にカバーしようと苦闘している発展途上の企業家たちの姿に他ならない。たとえばそうした典型的な例として、フィレンツェの聖職者でありながら、Frescobaldi 社の一員として、シチリア戦争の際メッシーナで捕えたメッシーナ貴族の身代金 1000 onces を受け取りにシチリアへ渡った Gulfucio de Iohanne の例がある (861°)。おそらくこの場合も乏しい資金をカバーするために、こうした危険を伴う仕事を、彼らは身体をはって引き受けたのではないだろうか。

以上は主に金融業者によって扱われた大きな金の動きだが、もっと小さなお金に関係してくる、

職人や専門家の分野に目を移すと、フィレンツェの名前は一挙に増加して、他を圧倒してしまう。勿論完全に網羅することは不可能なので、目についた例をアトランダムに列举すると、皮帯業者 (52°~54°), 刀剣業者 (83°, 117°, 118°), 医者 (537°, 669°), 金貨製造者 (777°, 781°, 783° 等々), 写字生 (796°, 798° 等), 判事や役人 (788°, 853°, 830°, 831° 等) あるいは隊長 (830°, 867°) 等々、職人像から貴族に至るまで、多種多様な階層が一挙に王の周囲に現われたという印象を受けるであろう。たとえば 847° の文書で、Carlo II が各地に派遣した使者 9 人の内、2 人までフィレンツェ人だった。それほど彼らは宮廷内に侵食していた。

これこそまさに Carlo がフィレンツェ市民に与えた特権のせいだという意見も聞えて来そうだが、すでに見た通り金銭的には、Carlo I が特にフィレンツェ市民だけを可愛がるべき理由などなかった。たしかにフィレンツェのゲルフィ貴族の一部は Carlo と共に戦い、個人的関係も深かったことが予想できるが、シチリア=ナポリ王国に進出した人々の多くはむしろポポロ階層であった。勿論 Carlo の王国に進出しているのは、フィレンツェ市民に限らないが、Terlizzi の資料から見るかぎり、ルッカやピサからの進出者は、明らかに王国の資源を輸出しようとしたり (667°, 679°, 699°), 王の命令で戦いの装備を買い付けようとしたりしている (848°) 典型的な中世都市の商人であるのに対し、フィレンツェ市民は極めて多様で、そうした商人のイメージからかなり逸脱しているように思われる。

たしかにフィレンツェは、トスカーナのゲルフィ都市の盟主として有利な地位にあったことは認められるが、やはり上述のような異常な進出意欲には、市民の間の熱意の特異な昂揚を計算に入れないわけには説明しえないのである。そのことは、ルッカ市民の一般庶民の消極性と比較すると一層明白である。すでに見た通り、この都市はボジボンシ攻略の費用をフィレンツェの約 7 割 (フィレンツェ 1992 lire (piccole) に対しルッカ 1416 lire) という、他のトスカーナの群小都市よりもずっと多く割り当てられていて (41°), また一時期は Labro Volpelli の属する Riccardi 銀行 (325°, 427°, 428° その他) が Carlo によって重用され、さらに Carlo I の治世の末期にはすでに見たように Baccusi 銀行が Bonsignori を凌ぐほどの活躍を示していたのだが、一部商人のこうした活動を除くと、職人や専門家あるいは貴族らの進出はほとんど見られない。そうした意欲の低さは、安全通行証が 2 通しか残っていないという事実からも察せられる。Carlo 王は決してこの市民を粗略には扱っていない。それを端的に示すのは、686° と 692° の文書で、王は前者でプロヴァンス地方、後者で王国内全土における往来と通商の自由をあらゆるルッカ商人に認めることを宣言している。いわば全市民に一種の安全通行証が与えられているのである。これはジェノヴァとの戦争の結果布告された文書だが、こうした積極的な誘いにもかかわらず、一部の商人以外は進出した記録が乏しい。

シエナ市民の場合、すでに見たような事情から、フィレンツェに較べて進出が遅れたことは確かだが、それでも王は同市のゲルフィ党を大切に扱い、229° と 342° の講和条件は決して苛酷なものではない。恐らくフィレンツェ市民には寛大過ぎると映ったと思われる条件で和解し、さらに同市民たちに王国内に来て通商する権利を認める (229°) と共に、「他のあらゆるトスカーナの忠誠な

人々がその商品に関して得ているのと同等の免税の権利をシエナ人が（中略）享受することを望む（342°）」³⁵⁾という誤解の余地なき但し書きを付けている。後者が布告されたのは1271年4月17日のことであり、少なくとも1268年のターリアコッツォの合戦のころまでは王国内の政情も安定していなかったことを考慮すると、その遅れはわずか3年に過ぎず、シエナの強力な金融の力が支援すれば、挽回不可能な差ではなかったはずである。だからシエナやルッカからは少数の進出しか見なかった理由も、単にゲルフィ党か否かなどという差によるのではなく（結局両市ともゲルフィ化している）、やはり市民自体の意欲や社会の性格の差異に基づいていると思われる。やはりこの時期にはむしろフィレンツェの方こそ例外的で特異な存在だったと言えるだろう。

なお Carlo I は、ギベッリーニ党員ら敵対する者には厳しいが、すでにいくつかの布告で見た通り、降伏した市に対してはむしろ寛大だったらしく、却ってその市民を積極的に誘致しようとさえした。その理由はやはり税金が取りたかったからで、フィレンツェ商人に与えた特権にも、同様の負担が付いていたことは確かである。王がフィレンツェ商人に対してだけ、ゲルフィ党に忠誠だといった理由で特に寛大だったり優しかったりせねばならない理由など何もなかった筈で、しかも多数のフィレンツェ市民が特別に王の愛顧を受けているとすれば、結局個人的才覚によるものと見なさざるを得ないだろう。そうした才覚も、やはりモンタペルティ戦以後の亡命や捕虜体験や進出意欲と無関係ではなさそうである。ギベッリーニと妥協して、他国からの亡命者を追放することで自国市民の亡命を避けたルッカでは、少なくともこの時期には、大量の人々の積極的な進出の基盤が準備されていなかったのだ。

第二章 13世紀のフィレンツェ発展の輪郭とその際の

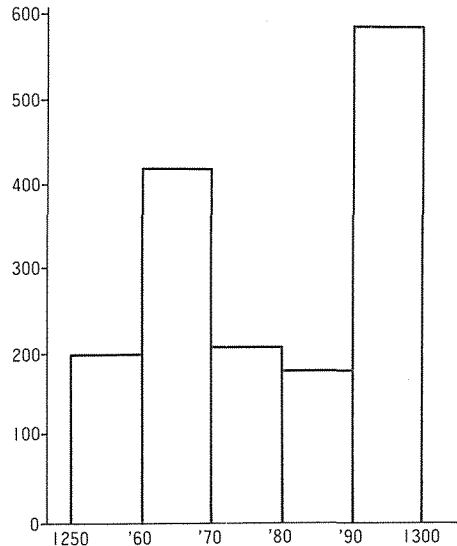
Carlo I d'Angiò の役割

すでに述べた通り、13世紀フィレンツェに関しては資料も乏しく、その姿を捉えることは甚だ困難ではあるけれども、前章に見た通り、他のコムーネには見られなかった変化が生じていた可能性が認められる。そこで本章では、そうした変化の輪郭を可能なかぎり総合的に把握すると共に、その軸となった基本的要素を明らかにしておきたい。

私がこの時代のフィレンツェの変化に最も早く気付いたのは、経済よりも文化の面における飛躍に驚かされたからで、それは斉藤氏らが指摘されたエコノミック・ブームよりも早いか、少なくとも同時に生じた現象であった¹⁾。だから私にはわが国の代表的な二人の研究者がほぼ一致しておられると思われるエコノミック・ブーム→人口増加→経済の拡大と文化的飛躍という、一見非の打ち所のない明解な図式がそのまま成立しようとは到底考えられないのである。たとえば人口増加という現象一つ取って見ても、少なくとも領域部からの移住という、恐らく最も重要と考えられる要素に関して、両氏の説に疑問の余地があることを示す資料が提出されている。それは M. D. Nenci 女史が、今日可能な限りの資料を駆使して行った領域部から市内への人口流入状況に関する実証的な調査結

果²⁾で、10年毎の市内への移住の状況を今日確証できる資料から再現すると以下のような表が得られるという。

下図 M. D. Nenci, Ricerche sull'immigrazione dal contado alla città di Firenze nella seconda metà del XIII secolo, in "Studi e Ricerche" I, Firenze 1981, P. 152. 1340例に関する調査。



13世紀後半における領域部からフィレンツェ市内への移住例の量的変化

たしかにこの研究自体いろいろ問題を含んでいることは確かだが、諸条件を等しいと考えると一応の傾向だけは窺えるのではないと思われる。それによると、意外にも領域部からの人口流入はギベッリーニ支配が久しく続いた1260年代に結構盛んで、70年代にはその勢いが鈍化し、80年代にはさらに低下、90年代にようやくブームと呼びうる状況が再現しているのである。勿論こうしたデータを無視してかかることも可能だが、その場合にはそれだけの根拠が必要である。しかし前章で私が唱えた、ブリーモ・ポボロによる私的企業活動の圧迫と全体的統制という仮説を認めるならば、そうした統制が取り払われた60年代の流入ブームはごく自然に受け入れられる。またその後のフィレンツェの経済活動が主に外部への進出であった点を考慮すると、70年代、80年代の沈静は意外ではないだろう。第一フィレンツェが誇る産業といえば、金融一商社活動と羊毛加工業とが最も主要なものと思われるが、後者に関しては星野秀利氏の画期的な実証的研究³⁾が、この時期にはまだ国際的水準からは程遠く、ようやく1320年代に国際的競争に耐えうる水準に達したことを証明している以上、この産業に関して真の国際的ブームなど生じる余地はなかったといえるのではないだろうか。またこの分野でも10年間におよぶブリーモ・ポボロ支配がむしろ抑圧的な役割を果たしていた可能性は、星野氏による各地の税関の調査⁴⁾から見ても考えられることである。ブリーモ・ポボロの成功をあくまで公的かつ軍事的性格のものだったと割り切ることによって、この時代のフィレン

ツェ経済の状況はかなりはっきりしてくるのではないか。少くとも前述の星野氏が作製された各地の税関の記録によると、フィレンツェの毛織物が記録に上り始めるのはようやく1257年のパレルモで、国内の北部の産業都市と量的に肩を並べ始めるのが1265年（ヴェネツィア）とされている。すでに見た通り Nenci 論文によると市内の産業が領域部から大量の労働力を招き寄せるに至るのは、ようやく1290年代のこととされているが、この結果は、星野氏の研究成果から見ても決して意外とは思えない。

だがそれだからと言って1270～80年代に、いわゆる「エコノミック・ブーム」が存在しなかったかということ、決してそんなことはない。残念ながら税関の資料集によって具体的にその変化を跡付けることは困難であるが、間接的にそうしたブームの存在を跡付けることは決して不可能ではない。

たとえば A. Schiaffini の『13世紀および14世紀初頭のフィレンツェの文献集』⁵⁾と、A. Castellani の『13世紀フィレンツェの新文献集』⁶⁾は、本来は言語・文献学的な目的から、フィレンツェ人が書き残した古い文献類を可能な限り蒐集し、刊行したもので、後者は題名からも明らかな通り、前者の補遺的役割を果たしている。未刊行のものを選んだために、実際にその中に含まれているのは、大半が商業関係の文献である。これら二つの資料集から、各年毎に関係している商業関係の文献の点数を拾い上げると、ある程度商業活動の頻度を推定することが可能ではないかと思われる。一つの文献の中に、同一年内の活動が重複している場合が多く、後年に下るほどその程度は高いが、計算を単純化するため、あくまでも文献数は1として計上している。さらにこうした資料集の性格上、古い文献程貴重なものとして丁寧に扱われている可能性があるが、散佚等の可能性と相殺すべき要素と見なす。極めて不十分な資料ではあるが、市民の商業活動を知る手がかりとして以下に示しておく。

13世紀後半における経済関係の文献の増加

A cura di A. Schiaffini, Testi fiorentini del Dugento e dei Primi del Trecento, Firenze 1954 (Ristampa).

A cura di A. Castellani, Nuovi testi fiorentini del Dugento, Firenze 1952.

	Schiaffini	Castellani	計
prima di 1250	1	1	2
'51-'60	5	8	13
'61-'70	2	14	16
'71-'80	9	41	50
'81-'90	14	48	62
'90-'1300	8	56	64

前述のような計算上の省略のため、飛躍の度合がそれ程には感じられないかも知れないが、実際の件数はむしろ幾何級数的に伸びているのである。特に60年代と70年代に大きなギャップがあり、それ以後後退は見られないという事実は、すでに別の論文で論じたフィレンツェの文化史的な飛躍とほぼ軌を一にするものである。従来の社会経済史的見方に立てば、経済発展則文化的飛躍とい

う図式の典型的な場合のようだが、すでに見たように文化的な飛躍の方が同時か、むしろ先行しているという事実を無視してはならないのではあるまいか。やはり一挙に生じた社会的変化こそこうした経済、文化両面の飛躍を説明しうるのではないだろうか。土台—上部構造という図式にこだわってはいは、この時代の変化は見えただけでなく、誤解してしまう可能性があるのではないか。思想に殉じるためにはいかなるデータをも無視するという立場の人々は別だが、やはり敗戦のショックによって、今まで体験されたことのない新しい性格の社会が生れ、それが従来の遅れを取り戻すための国外進出ブームを生み出したと見なしうるのではないか。しかも文化史的資料から見るかぎり、フィレンツェの文化史的な優位は約3世紀にわたって続くのである。それは単なる経済的好況などというものではなくて、市民生活の根底にまで影響した変化と見なすべきものである。またたとえばフィレンツェ市民によるティロル地方への進出が、1269年、「Beliotto Rabbuffatti がトレントの領主である司教から、直接年間 300 libbre の租税を払うことで貨幣鑄造権を与えられた」⁷⁾ 時期から始まっていることを考えると、フィレンツェ市民の進出意欲の方向がナポリやフランスにのみ向いていたわけではないことや、シチリア—ナポリ王国に生じた企業機会がフィレンツェ市民を変えたという説では不十分であって、やはり他のコムーネには認められない外地への進出意欲が市民の間に行き渡っていたことを認めるべきではないかと思われる。

そうしたフィレンツェ市民の進出意欲の旺盛さが推測される例は他にもいくつか見出される。たとえば1277年に、Frescobaldi 社は、Bardi, Cerchi, Falconieri 等の有力銀行と手を組んでイギリスの金融活動に参加し始めたとされている⁸⁾。この年には仏王 Filippo III がフランスに進出している金融業者に対して、高利貸の罪を犯しているという口実で、厳しい断圧を加えたとされており⁹⁾、勿論フィレンツェ市民もその対象とされていて、英国進出もそれと無関係ではありえない。この場合フィレンツェ商人はそうした災いの内にさえ、新市場への進出の契機を見出していたのである。あるいはやや時代は下るが、一度は国内商人の保護のため1265年に外国商人の総追放を行ったスペインのアラゴン王国で、1294年 Giacomo II が Filippo Peruzzi に対して「彼の国に住みそこで商業を行う権利を与えた」¹⁰⁾ とされている。こうした特権自体が商人の意欲と才覚の現われに他なるまい。

Carlo I の時代が、フィレンツェ経済にとって重大な転換期だったことは、フィレンツェのいくつかの重要な家の商業活動が、過去に遡るとこの時期に辿りつき、それ以上は遡行できなくなるという事実によっても推察しうる。たとえば Saporì の研究によると Bardi と並んでフィレンツェを代表する大銀行だった Peruzzi 社の場合、「Filippo Peruzzi とその会社の最古の記録は1274年」¹¹⁾ であり、「Riccardi のそれは1273年」¹²⁾、14世紀後半には恐らくフィレンツェで最も富裕だったと思われる Alberti は火災等のためにずっと遅れて1302年¹³⁾、Gianfigliuzzi のそれは1283年¹⁴⁾ 等々、最古の記録がこの時期に集中している例が多い。Fiumi にも同様の研究¹⁵⁾ があって、その成果は Saporì に較べるとやや曖昧な仕方では記されているが、結論はほとんど一致する。たとえば Acciaiuoli の場合、その家祖がプレッシャからフィレンツェに移住した時期は1160年と古いが、封建貴族の家柄で

はなく、その財産が確立されるに至るのはようやく13世紀末から14世紀初頭にかけてのこととされる¹⁶⁾。あるいは14世紀後半から15世紀の Medici 時代の到来（1434年）までの間、フィレンツェの市政のリーダーシップを握り続けたあの一族「Albizzi 家はようやく13世紀末頃に確立した」¹⁷⁾と断定され、Strozzi 家の家祖 Strozza di Ubaldino も13世紀中葉の人とされている¹⁸⁾ので、同家の繁栄もほぼこの時期から始まったと見なし得るであろう。Medici の確立はさらに遅かった筈だし、13世紀後半に最も巨大だった Bardi, Cerchi, Mozzi 等も共に、Villani によって「生れが小さく」、「短期間で上昇した」¹⁹⁾と伝えられているとする。もっとも Cerchi の場合、Villani は「1215年に上昇し始めた」²⁰⁾としているので、必ずしもこの時代と合致しないが、全体として眺めると、1260～80年が一つの境界域を形成していると思なうのではなかろうか。

残念ながら、私がこうした深刻な社会変化の重要な原因と見なしている、モンタペルティ戦争における大量死の精神的影響について、同時代に記された証言はほとんど残されていない。しかしその結果当時の市民が感じた、悔恨や反省の念を探る手掛かりが全くないわけではない。

たとえば在俗修道団体の存在などはどうであろうか。すでに記した通り、ブリーモ・ポポロはしばしば誤解されるような親法王的な集団ではなくて、あくまで独立志向が強烈で、自己の主権下にある領土を増やそうという意欲も極めて旺盛であった。だからギベッリーニ党と戦っていたにもかかわらず、法王庁とも対立していた。Quilici は教会財産の所有権や、聖職者階級の裁判権等をめぐる、世俗君主と教会との間で起こり勝ちな紛争が、ブリーモ・ポポロと法王庁の間でも、容赦ない形で展開していたことを証明している²¹⁾。とりわけブリーモ・ポポロは「病院の財産と経営とに関心を示し、」²²⁾さらに「1257年以降はいかなる免除も例外なしに、（聖職者たちは）通常の司法当局の下で、民法および刑法の規定に従うべき」²³⁾だとする決定を行ったといわれる。当然法王 Alessandro IV はこの決定を認めず、早くも1256年にフィレンツェのポポロ政府の関係者や議会を破門し、市に対しても聖務停止令を発令した。市当局が使者を派遣して交渉した結果、処分は一度は撤回されたものの、やがて忽ち両者の関係は悪化し、やはり Quilici によると、「1258年、市当局はその憲章の中に、他のトスカーナ都市が受け入れた異端者に対する新しい対策や罰則を加えることを拒否。法王によって任命された異端審問官でフランチェスコ派の修道士である Giovanni de Oliva はコムーネの領域内で説教することを禁止されただけに止まらず、領域から追放された」²⁴⁾とされている。Villani は、1958年にブリーモ・ポポロが、「何の罪もない」²⁵⁾ヴェッロンブローザ修道院長を、ただ親戚にギベッリーニ党の有力者がいるというだけの理由で捕え、拷問にかけた後に処刑したため、法王によってフィレンツェのコムーネと市民とが破門されたと記しているが、実際にはそれ以前に長期にわたる確執があって、妥協の余地なき関係に陥っていたことは明らかである。以上の経緯を見ても、ブリーモ・ポポロがゲルフィ党などではありえず、その戦いの目的が異っていたことが確実で、この政権が健在ならば、Carlo I との関係は良好ではありえなかったことも確かである。Villani 自身「悪しきポポロによって行われたこうした罪や、他の多くの行為のために、多くの賢い人々の口から、神がその聖なる裁きとして、これ以後に私が述べるモンタペル

ティの戦いや敗北という形で、今述べたポボロに対する報復が行われることをお許し給うたのだという噂が流れた」²⁶⁾と記しているが、前述のような事情の下で未曾有の敗戦と大量死が生じたならば、このようにそれを神罰と見なす人々が出てくるのは当然である。結局フィレンツェ市民がゲルフィ党に接近して利害関係を重ね合わせるに至ったのも、敗戦の結果なのである。そうした変化がなければ、法王庁とも Carlo とともに良き協力関係を結ぶことは不可能だった。

こうした敗戦後のフィレンツェ市民のメンタリティーの変化をはっきり示しているのは、俗人修道団体の増加ぶりである。Davidsohn の調査²⁷⁾に基づき、創立年代別にその数を示すと以下のような表が出来る。

中世フィレンツェにおける俗人修道団体の増加を示すリスト

R. Davidsohn, *Forschungen Zur Geschichte von Florenz, Vierter Teil*, Berlin 1908, pp. 426~440. より作製

	新規創立数	総計
1201-10	1	1
1241-50	3	4
1271-80	8	12
1281-90	2	14
1291-1300	6	20
1301-10	3	23
1311-20	3	26
1321-30	4	30

たしかにこうした団体の数が、その成員の数を示しているわけではなく、その実数を知ることは困難だが、実際の成員の増加も顕著だったことは確かで、Davidsohn も13世紀末ごろになるとどの団体にも入っていないような職人は、他の市民から胡散くさく見られて異端者扱いされる危険があったと記している²⁸⁾。

前表で注目されるのは二つの空白期間で、第一のものは1211~40年の30年間にわたる空白だが、それはゲルフィーギベッリーニ闘争や、周辺のコムーネや封建領主との戦争に明け暮れた時期であった。そうした世俗的関心が、市民の宗教的情熱を抑圧したらしい。我々にとってさらに興味深いのは、1251~70年の20年間にわたる第二の空白である。この時期はブリーモ・ポボロが成立して以来、モンタペルティ敗戦の結果生れたギベッリーニ政権が市外に追放されるまでの時期がその大半を占めている。いずれの政権も世俗的で、教会には対して敵対的であったので、この空白は我々にとって少しも意外なものではないけれども、やはり全く空白であることで、ブリーモ・ポボロ時代のメンタリティーをはっきり証言している点は重要である。これまで見てきたいくつかの変化と同様、この場合にも70年代に増加して、一挙に総数が従来の三倍に飛躍している。その後80年代に一時低下するが、それ以後も一貫して増え続ける。Herlihy の調査²⁹⁾によると、1427年当時、フィレンツェはこうした修道団体の絶対数が他のトスカナ都市に比して抜群に多い都市とされてお

り、教会数との比率を較べても高い³⁰⁾。1250～60年代の空白に較べて、1270年代の8という数字は明らかに異常であり、やはりここでもプリーモ・ボボロ等によって抑圧されていた傾向が、その遅れを取り戻すために一挙に作用したと見なしうるのではないだろうか。さらにこうした団体は、Boccaccio のような古典愛好家の知識人から見ると³¹⁾、庶民の無知につけこんだいかわしい存在と思われた可能性があるが、やはり市民の生涯教育のために果した役割は少なかったはずである。13世紀の末頃から14世紀の前半にかけて、フィレンツェでは多くの素朴な啓蒙書が書かれ³²⁾、ダンテの引立て役を演じると共に、フィレンツェの知的生産性を高めたわけだが、そうした現象も、こうした全市挙げての修養・啓蒙運動とは無関係ではありえない。したがって、モンタペルティ敗戦に伴う市民の反省こそ、フィレンツェ市民の知的生産性を高めた契機だとも考えても決して見当外れではないのである。

以上見てきたような多方面にわたる変化が、ほぼ同じ時期に生じており、その前後で急激な落差が生じている以上、歴史学者が好んで多用する〈徐々の変化〉とか〈何世代にもわたる蓄積〉等の説明では不十分であり、また決してその影響が皆無だというわけではないが、斉藤氏らによる、シチリアーナポリのアンジョー家支配によって生じた経済環境の好転による説明だけでは十分だと言えないのである。これほど様々な方面に及んでいる急激な変化の根源を探るならば、結局大量死を伴ったこの時期のモンタペルティ敗戦に辿り着かざるを得ないのである。すなわち敗戦の結果生じた市民の大きな意識の転換、それに応じて起きた市民の戦争への関わり方の変化や、市民社会そのものの変質以外に、先に示したような多方面での断絶と飛躍とを説明してくれる手掛りは考えられないのではあるまいか。

もう少し具体的に、特に軍制を中心として、モンタペルティ敗戦前後の変化を明らかにしておく必要があるだろう。プリーモ・ボボロ政権の最も目立った特性の一つは、Davidsohn が『フィレンツェ史』中の「勝利するボボロ」³³⁾と題する章で描いている、この政権の好戦性と攻撃性であった。周辺に強力なライヴァルが少なかったおかげで、ボボロの尚武的な拡大政策は一見成功を重ねてますます加速していったように思われる。今日残されているかつての市内と領域内の一部の動員名簿である『モンタペルティの書』³⁴⁾から、かなり詳細に訓練や動員の状況が推定できるのであるが、一部の要員等の例外を除き、15才から70才までの男子を全員動員して³⁵⁾、地区毎に編成するという軍制自体は、中世コムーネにとって決して例外的な方式ではなかったことは確かである。それにもかかわらず、従来は出陣を避けることにしていた冬の最中の雪中の行軍や³⁶⁾、市場等で戦争批判のカンツォーネや演説を禁じる³⁷⁾等、異例の措置を取ることによって、中世コムーネの軍事的可能性をとことんまで追究している点において、やはりプリーモ・ボボロは新しい新しい試みを企てていたといえそうである。従来の研究者たちは、こうした好戦性や攻撃性に関して十分な考慮を払っているようには思えない。封建勢力との戦いという立派な大義名分によって、この政権の特異な性格は褒められこそすれ、批判すべきものとは見なされなかったようである。しかし実際にはその戦争は、どちらが正義だとか民主的だとかは判定のつけ難い、周辺の中小コムーネへの侵略や紛争で

ある場合が多かったのだ。

敗戦の状況についてはすでに何度も記したので省略するが、特に重視すべき点は、死者も捕虜も主にポポロ階級に集中していた³⁸⁾という事実で、亡命者達まで含めると、少な目に見つっても一万人近い犠牲者が出ていて、ブリーモ・ポポロ政権を維持することは、ほとんど物理的にも不可能になったという事情であるだろう。Villani は、フィレンツェのグェルフィ党が戦わずして亡命したことを批判³⁹⁾しているが、当時の潰滅的状況を考えると、フィレンツェを防衛する組織自体が崩壊してしまった以上、むしろ当然だったと考えるべきではないだろうか。その後のギベッリーニ時代には、当然かつての脅威だったフィレンツェの軍隊を弱体化するための措置は取られていた筈で、Guido Novello がコムーネの武器を接収して、自分の城へ送った⁴⁰⁾というのもその一つと見なせよう。

ベネヴェントの戦い以後の動きもかなり複雑で様々な解釈の可能性があるが、確実なことはポポロ政権が再建されなかったことと、ブリーモ・ポポロ政権時代に効果を発揮したカピターノ・デル・ポポロという官職も、一時はオルヴィエートから就任予定者を招く⁴¹⁾所まで進みながら、結局中止され、ずっと後年に従来とはやや異なった意味を持つタイトルを伴って漸く復活されている⁴²⁾という事実である。実際には、グェルフィ党の亡命者の帰国と同時に、当初6年と4分の3の任期（現実には約2倍続いた）の予定で、Carlo I がフィレンツェのボデスタに選ばれ⁴³⁾、代官を派遣して統治するという事態が生じている。こうした事態が市民生活におよぼした影響についても、従来はともすれば法王と Carlo が結託して押しつけた結果だとして、ほとんど無視され勝ちであった。しかし少くとも、かつてあれほど強力だったブリーモ・ポポロの再建を許さなかったという点一つ取っても、その影響は決して小さくはないのである。たとえばこうした反 Carlo 感情の強い Davidsohn は、「民主政に対する反感は、アンジョー一家に極めて深く根付いていたので、半世紀後 Carlo の孫の Roberto 王が8年半にわたりフィレンツェの領主権を保持した時も、彼の代官である Jacopo Cantelmi が最初に行った行為（1313年）は、当時カピターノ・デル・ポポロだった人を追放することで、その地位はその期間中空位とならざるをえなかった。それと同じことは、1325年に人々が市の領主として Carlo の曾孫で、同じく Carlo と呼ばれるカラブリア公を市の領主に出した時も起こった……」⁴⁴⁾といかにもいまいまいげに記しているが、この文章を読んで我々が感じることは、アンジョー一家に伝わる反民主的感情などよりも、わずか60年の間に、約3分の1近い期間、その一族から自分達の領主 (Signore) を選出したという、フィレンツェと Carlo の一族との長期にわたる関係の深さではあるまいか。1342年のアテネ公の独裁政権も、こうした関係を土台にして成立したことを考えると、ベネヴェント以後のフィレンツェのアンジョー王家に対する依存感、これまで十分評価されてきたとは思えない。しかもその依存関係は、必ずしも一方的なアンジョー側の押しつけではなかったことは、事実関係を辿っていくと明らかである。Carlo I 自体自分の領地のことが手一杯である上に、法王庁との摩擦を避けるため、トスカーナの権利に対してはそれ程執着を示しているようには思えない。むしろシチリア戦争におけるフィレンツェの突出した協力ぶ

り⁴⁵⁾や、捕虜の身分から解放されて帰国した（戴冠前の）新王 Carlo II への歓迎や協力⁴⁶⁾から見るかぎり、むしろフィレンツェ市民側の方がより積極的にアンジョーとの関係を維持したがっていたと見なしうるのではあるまいか。

Carlo のコムーネの軍隊に対する態度は、必ずしも完全に一貫したものとはいえない。各市に対して金銭の負担だけを割り当てて、兵員を自分の方で準備する例が比較的多く見られる（138°, 431°, 432°, 463°, 613°, 625°, 647°, 813°, 886°等）けれども、ボジボンシ攻略の際のように王の軍隊がフィレンツェ等ゲルフィ都市軍に協力して、後でその費用を分担させる（28°, 41°）こともあれば、あるいは各都市に騎士と歩兵の供出を命じている例（553°～565°）もある。最後の場合には勿論各コムーネの兵力を、自分の家来の指揮下に服属させて用いる方針であった⁴⁷⁾。このように必ずしもその政策が常に一貫したものであるとはいえないが、やはり全体的な傾向としては、金銭を支払わせて兵員を配置するという、いわば傭兵制の先駆のような方式が主流であるように思われる。それと共に注目されるのは、1273年7月上旬、トスカーナの各都市に発せられた、*Tallia Militum*（同盟軍）構想のための会議への招集状（584°～604°）で、各コムーネが資金を分担することによって、防衛のための軍隊を共同で設置しようとするものであった。こうした構想が現実化したものが、L. Naldini が「13世紀後半における《トスカーナの秘密同盟軍》」⁴⁸⁾において明らかにした同盟で、1280年代の前半には効果を挙げた。この軍隊は後の傭兵軍よりも厳重に統制されていたが、Naldini によると、それぞれの市の紋章ではなくて、「我等が王 Carlo」の紋章が楯に描かれていたという事実⁴⁹⁾からも、Carlo の軍隊との継続性が認められる。すでに見たように Carlo は降伏した都市に対しては、賠償金は取り立てても、領土その他に関しては寛大で、フィレンツェ等が従来のような侵略を行うことを許さなかった。ゲルフィ党政権やそれ以後のブリオーリ政権も、ゲルフィ党の利益のために派兵することはあっても、自国の直接の利益のために戦うことは自粛せざるを得なかった。こうして戦争は、かつてのように目に見えた成果とは無関係で、より抽象的で間接的なものと化していったようである。

まだどこまでが意図的なものであったかは兎も角、Carlo とその家来たちは、コムーネの軍隊との間に距離を起し、かつてフィレンツェに顕著であった好戦性や攻撃性の復活を抑制するような方針を採用しているように思われる。その一例がシエナとの間で戦われた *Colle di Val d'Elsa*（エルサ川谷のコレ）の戦い（1269年6月）で、これは約10年以前のモンタベルティ戦争の復讐戦であると共に、なおシエナで捕われていた捕虜を解放するためにも不可欠の戦いであったので、志気は十分に高かったにもかかわらず、王のトスカーナ代官でゲルフィ党側の全軍の指揮者である Giovanni Britaudi は、前日から出陣の準備を重ねていたフィレンツェ市民軍の到来を待たず、800騎（内フィレンツェ騎士は200）とわずかな歩兵で、敵方の騎士1400と歩兵8000を襲ってこれを潰走させたため、市民軍は、合戦に間に合わなかったされている⁵⁰⁾。こうした Carlo 側の市民軍軽視と、ゲルフィ党と Carlo 主体の動員、そして戦争目的の抽象化と間接化とが、ギベッリーニ時代の空白を経て復活したコムーネの軍隊の志気を低下させたことは十分想像しうる。

もっともこの点に関しては、恐らく当代におけるイタリア傭兵制の最高権威と思われる D. Waley が、今まで私が述べて来た見解と趣を異にする意見を表明していることを、私は素直に認めておきたいと思う。Waley は、「12世紀より14世紀におけるフィレンツェ共和国の軍隊」⁵¹⁾と題する論文の中で、フィレンツェ共和国の動員状況を克明に調べた後、たしかにモンタペルティ以後の動員力が、騎士に限ると、モンタペルティ1400から、カンバルディーノ600へと「最初の低落 (initial decline)」⁵²⁾があったことは認めるものの、その後アルトパッショの戦い (1325年) の500騎まで、ほぼ同じ水準が続いており、動員の方法に関しても変化が認められないので、Villani が証言しているような、いわば市民の軟弱化と呼ぶべき変化は認められず、「フローレンスの富は、それ自体の市民を強化するために用いられたのであり、彼らを取り換えるために用いられたのではない」⁵³⁾という結論を下して、少くとも14世紀の当初4分の1位の間までは、フィレンツェ市民は傭兵制度に頼るほど墮落していなかったとしている。動員の方法に変化が無かったとされている点に関しては、疑問の余地が無いわけではないが、一応認めるとしても、やはり問題はまず「最初の低落」をいかに評価するかであろう。Pieri によると、当時の合戦では騎士こそ攻撃の主力であり、歩兵で勝利が得られた例は少ないとされており⁵⁴⁾、攻撃力の水準の半減は、やはり大きな方向転換を意味しているのではないだろうか。しかも我々は、Naldini の研究から、共同防衛体制が成立していて、「1276年の和平以来約8年間トスカーナが平静だった」⁵⁵⁾という事実を知っている。しかも戦争の主導権はゲルフィ党に握られ続けて、ポポロは常にそうした負担を受動的に押しつけられ続けていた。もはや戦争に対して期待を寄せることができない代りに、外国からの軍事的脅威におびえる必要からもほぼ解放された状態が、少くともこの時期のフィレンツェ市民に与えられていたといえるであろう。しかしシチリアの反乱以後のギベッリーニ勢力の抬頭や、それ自体はゲルフィ党にとって有利な筈だがやはり混乱の原因となったピサ海軍のメローリア沖における大敗北等は、やがて1280年代後半の諸紛争をもたらし、ついにダンテも参加したというカンバルディーノの合戦に至る。すでにこの時期のフィレンツェ軍には、それ以後の特性をなす依存性と消極性ははっきりと窺える。その依存性は、最終的な決戦に臨む前に、ちょうど捕虜の身分から帰国途上にあった Carlo II に頼んで、その家来 messer Amerigo di Narbone を総指揮官に任命してもらったことから窺われる⁵⁶⁾。カンバルディーノ合戦におけるフィレンツェ市民の関 (とき) の声は、「Narbone Cavaliere (騎士ナルボネ)」であったと伝えられるが、相手方のアレツォ軍が伝統的に市の守護聖人の名を用いて「San Donato Cavaliere (騎士の聖ドナート様)」と叫んでいるのとは対照的で、フィレンツェというコムーネの特異性を象徴しているエピソードである⁵⁷⁾。またこの戦いに至るまでの過程でも、小国アレツォが異常に執拗にフィレンツェを挑発している点が奇妙であり、この合戦に際しても、騎士の数はフィレンツェ側が倍近かったにもかかわらず、「フィレンツェ市民が髪を女のように長く伸ばして、その髪を櫛で梳いたりしていやがる、と言って彼らを嫌い、取るに足らぬものと見なして彼らを軽蔑していたので」⁵⁸⁾、アレツォ市民たちやギベッリーニ党の人たちは、フィレンツェ軍をぜんぜん怖れなかった、と Villani が証言している。事実合戦が始ま

ってからも、いくらか時代錯誤的な英雄 Corso Donati が軍規に反して敵陣の横腹を衝かなかつたら、勝敗の帰すうは分らない程際どい勝負だったと言われている。すでにこの時点で、勇猛果敢なブリーモ・ポボロ時代のフィレンツェ軍の面影は失われていると言えるだろう。事実このころから、フィレンツェ市民は軟弱で戦さが下手だとする嘲罵の声が各方面で現われ始めているのである⁵⁹⁾。だから軍制の点では Waley の説が正しいとしても、その制度を支えている人間はすでにブリーモ・ポボロ時代とはかなり異なっていたと見なすことができる。

だがこうした変化が果してフィレンツェ市民の評判を下落させ、本当に周辺の市民の軽侮の的にしたであろうか。どうやらそうではなかったらしいということが、次の表から分るはずである。すなわち Davidsohn が丹念な調査の結果⁶⁰⁾まとめた、フィレンツェ市民による他市のポデスタやカピターノ職への進出状態の統計から判断する限り、軟弱化した筈の80年代以降の方が、はるかに多くの市民が他市のポデスタやカピターノに就任しているのである。ということは、実質的な威信が高まっていると判断しても差支えあるまい。

外国（他のコムーネ）のポデスタ、カピターノ等を勤めたフィレンツェ人の期間別リスト

R. Davidsohn, *Forschungen*, op. cit., Vierter Teil, pp. 557-577 より作製

1201-10	3	1261-70	15
1211-20	8	1271-80	29
1221-30	9	1281-90	77
1231-40	29	1291-1300	108
1241-50	12	1301-10	41
1251-60	22	1311-20	29
		1321-30	31

興味深いもう一つの事実は、1280年代の前半にはすでに、1290年代にほぼ等しい最高水準に達していたことで、それが1280年代後半には半減してしまうのである。

1271-5	9	1281-5	52	1291-5	53
1276-80	20	1286-90	25	1296-1300	55

さらに1280年代の後半を年毎に調べると、戦争が激化した年に激減していることが分る。

1285	11	1287	3	1289	1
1286	3	1288	4	1290	14

何と1289年には、カンパルディーノの戦いが災いして、ピストイアのポデスタに就任したコルソ・ドナーティが唯一の存在となっている。こうした体験は、市民の威信が軍事力に関する評判にはそれ程左右されないことを市民に教えたはずである。特に80年代前半の伸びは、市の長年にわたる平和がフィレンツェを指導的立場に置き、周辺の地域に一つの実在するモデルのごとき役割を引き受けさせたことを示している。こうした様々な経験が、恐らくかつてのブリーモ・ポボロ時代の市民には耐え難かったと思われる、軍事的には依存的で消極的でありながら、したたかに繁栄し続け

る状態にフィレンツェ市民を慣れさせていったのである。また同時にそうした在り方の実例となつて、経済的な発展を持続することによって、周辺の都市にも影響を及ぼし続け、軍事力だけではとても実現できなかった広大な地域に、似た価値感を持つ、ほぼ均質の文化圏を形成することに成功したのである。

結 論

1. Carlo I がフィレンツェ市民に与えた安全通行証および安全保証状には、シエナやピストイア市民に与えられたそれらと較べて、はっきりした差異がある。フィレンツェでは企業集団の成員の数が他市の半分以下、しかもその約3分の2は家族より成り立っている。それらが企業集団の特性を反映しているとすれば、フィレンツェでは明らかに私的企業活動が他市に較べて遅れていたものと思われる。

2. そうした遅れの原因は、グェルフィ対ギベッリーニの党争と10年間に及ぶブリーモ・ボボロ政権に求めざるを得ない。特にこの政権は、集团的に軍事活動に専心する余り、市民の精力を戦争に集中させ、その結果私的企業活動の発達を阻害した。この時代の経済発展の証拠と見なされて来たフィオリノ金貨も、実は公的軍事活動の行き過ぎをカムフラージュするための経済面におけるデモンストレーションの一種であったと見なしうる¹⁾。

3. モンタペルティにおける敗戦は、こうした公的軍事活動の行き過ぎを停止させ、私的企業活動を抑圧して来た集团的統制を一挙に打破するために有効であった。ブリーモ・ボボロが法王庁と対立していたために、敗戦は神罰と見なされ、市民の価値感を一変させることが可能となった。

4. 敗戦後市外にのがれたフィレンツェ亡命者たちは、Carlo I の南下の際、一部は金融面、一部は軍人として、シチリアーナポリ王国征服に協力した。しかし金融面では、Bonsignori 銀行を中心とする、シエナ亡命者の金融業者の協力が抜群であり、ローマの業者らも協力し、フィレンツェ亡命者は資金難を自らの奔走によって補わなければならなかった。

5. 前項のような事情で、Carlo I の王国成立後もフィレンツェ市民が大口の金融において果たした役割は余り大きいとは言えない。日常業務は前述の Bonsignori, Salimbene, ピストイアの Gerardini らが担当、法王庁への貢租の支払いも Bonsignori が担当した。他方ピサ賠償金も主に Bonsignori や Salimbene が引き受け、フィレンツェの Frescobaldi, Spiliati, Scala らは全体の3分の1を集金して Bonsignori に払い込む役目を割り当てられている。シエナ賠償金は Salimbene が担当し、シチリア戦争遂行のための法王庁から Carlo I への巨額の借款は、何故かルッカの Baccusi 銀行が主に担当している。フィレンツェの銀行は自分の市からの献金等を引受けたが、それすらピストイアの Clarenti 銀行がまとめている。

6. しかし、フィレンツェの刀剣業者から写字生、貨幣鑄造等々の職人や、医師、判事ら専門家の姿が、Carlo I の周辺に多数見られ、王の役人となっているケースも多い。前項から見ても分

るように、フィレンツェ商人は資金難のために Carlo に対して特別恩を売ったわけでもないのに、他市とは比較にならない進出ぶりを示しているのである。実際王はルッカやシエナの市民に対して、フィレンツェ商人らと同等の権利を保証することを文書で明記しており、彼らを誘致しようとした形跡もある上に、先に見た金融関係に基づく影響力に頼れば、商人たちの進出はさらに有利だったはずだが、他市の市民にはフィレンツェ市民のような進出への意欲は感じられない。これは、王が与えた恩恵や特権よりも、むしろ出身母胎となった都市のその時点における気風や文化的背景に由来する差だと考えるべきではないだろうか。

7. このように考える時、こうした進出意欲は、当時のフィレンツェで見られた知的生産性の飛躍、俗人修道団体の激増、商業活動全般の活発化等の現象と根を一つにするものと見なさざるを得ない。これらの現象を統一的に説明するには、やはり経済環境の好転による機会の増加という説明だけでは不十分のようであり、時間的に考えてモンタベルティ敗戦に伴う社会変化に辿りつく。すなわちモンタベルティ敗戦によって、一時期コムーネの軍隊が崩壊し、地域的結束のたがが外れたことや、ポボロ階級から大量の犠牲者が出て、それらの負担を個々の家が荷わねばならなかったことのために、それまで抑制として強力な支配力を発揮していたコムーネの一体感が弱まり、家本位の活動が活発化し、また家同志の競争が激化した。家は生き残りを賭して否応なしに新しい経済活動に乗り出すことを強いられたのだ。

8. モンタベルティで勝利を得たギベッリーニ党が、コムーネの軍隊の再生を恐れて、その武器を接収したのは当然だが、長期にわたる領主権を得た Carlo の代官たちも、一応再生したコムーネ軍と協力することはあっても、これに頼ることはなく、コッレの戦いのような晴舞台にも加えなかった。カピターノ・デル・ポボロという重要な指揮官の職の復活をも押えて、軍隊をゲルフィ党の指揮下に置くことで、コムーネの軍隊の主導権が、ポボロの手中に戻ることを妨げた。ようやくプリオレ政権の成立によって、形式上はポボロの主導権が回復したが、実質はゲルフィ党の統制が生き続け、1290年代前半の混乱も、ゲルフィ党主導の戦争に対するポボロ側の抵抗が重要な契機を成している²⁾。プリーモ・ポボロ当時とは逆に、ポボロはむしろこの時点では反戦の立場に移っているといえるだろう。

9. Carlo はしばしば自分の軍隊でコムーネの戦争や防衛を肩代りし、一種の傭兵制の先駆的形態や、集団防衛体制などを導入して、コムーネの軍隊の必然性や目的等を曖昧なものにした。ゲルフィ党による遠隔地への軍隊派遣等は、戦争目的を抽象的で間接的なものとして、プリーモ・ポボロ時代の軍隊の志気を支えていた、具体的で直接的な成果と無縁なものとした。常に周辺のコムーネや小領主の侵略に脅えねばならなかった小コムーネと違って、フィレンツェ市民は法王庁およびアンジョーの王国との関係に忠実であるかぎり存亡の危機におびえる必要はなく、逆に戦争によって利益を期待することもなくなった。だからやや縮小された規模でかつての軍制が復活しても、かつてのようにポボロ階級の関心を集める可能性は全く失われた。第一ポボロ階級自体、そうした共同体の夢に賭ける愚かしさを十分に味わっていて、経済、文化両面の私的活動に忙しく働かねば

ならなかった。二度目のポポロ政権は、こうした私的な企業活動の連合体を基盤として再建されたが、こうした点でブリーモ・ポポロとは根本的な違いがあることを認識すべきである。といっても、人的要素にはある程度の連続性が認められるのは当然である。しかしもはやその存立の基盤も、人材発現の回路も全く異っており、あくまで私的企業活動の勝利者たちが、グェルフィ党の既成の権利と妥協することによって成立したものである。

10. そこで13世紀後半のフィレンツェの発展のために、Carlo I が果たした役割は、大別すると二方面に分類できるであろう。その一つはすでに、清水、斉藤両氏が指摘しておられる通り、王国征服に伴って平和な経済活動の場をイタリアに作り上げたり、フランスとイタリアとの関係を密にすることによって、フィレンツェ市民の経済活動の環境を大巾に改善したことである。しかしそうした環境の活用におけるこの市民の積極性には、モンタペルティ以後のフィレンツェ内部の社会変化の影響が認められる。そこでもう一つ無視しえない Carlo I の役割は、フィレンツェ共和国内部に進行しつつあるこうした社会変化を保証し、そのスムーズな進行を助長した点にあった。その変化の基盤は結局市民の軍事ばなれにあった。たしかに軍制は残っていても、市民は中世イタリアのコムーネ固有の社会的制約を、その意識の面で越えていたのであり、こうした社会の内的変化の彼方にイタリア・ルネサンス都市があった。

註

はじめに

- 1) ビエール・アントネッティ, 中島, 渡部訳, フィレンツェ史, 東京 1986, p. 5.
- 2) id.
- 3) 清水広一郎, 中世イタリア商人の世界—ルネサンス前夜の年代記—, 東京 1982, p. 226.
- 4) id., pp. 215-6.
- 5) 斉藤寛海, 都市の権力構造とギルドのあり方—ヴェネツィアのギルドとフィレンツェのギルド—, 史学雑誌, 92-3号, 東京 1983, p. 74.
- 6) 私が敗戦後の日本とのアナロジーで、モンタペルティ—ベネヴェント仮説を発表し始めたのは、沢井繁男氏らの同人誌『タクロ』, 京都 1985, 所収の試論においてであり、その後関連の論文やノートを3点発表しているが、敗戦の歴史学という形で類似の現象を考察できるのではないかと考えている。
- 7) N. Housley, *The Italian Crusades*, Oxford 1982, pp. 11-2 および n. 30.
- 8) *I registri della cancelleria angioina ricostruiti*, ed. R. Filangieri di Candida et al. 28 vols. (Napoli, 1950-), pubblicati dall' Accademia pontaniana.
- 9) Sergio Terlizzi 編, *Documenti delle relazioni tra Carlo I d'Angiò e la Toscana*, Firenze 1950.

第一章

- 1) id., p. 3.
- 2) G. Villani, *Cronica*, Roma. 1980, T. II, Lib. VI, Cap. LXXXIII, p. 120.
- 3) id., Cap. XLII, p. 64.
- 4) id., Cap. XLI, p. 62. 皇帝 Federico II はフィレンツェで死ぬという予言を怖れて、一度も訪れなかったとされている。
- 5) 本名 Rolando Bandinelli, 20年余 (1159-81) 法王位にあって、皇帝 Federico I に対抗して、法王の権益を

守った。

- 6) E. Jordan, *Les origines de la Domination Angevine en Italie*, T. II, New York 1960 (Paris 1909 の reprint), p. 344.
- 7) 真偽は不明だが, A cura di A. Lisini e F. Iacometti, *Cronaca Senese dei Fatti Riguardanti la Città e il suo Territorio di Autore Anonimo*, R.I.S. 15-VI 所収, *Città di Castello* 1939, 1260年の項。
- 8) D. Waley, *Condotte and Condottieri in the Thirteenth Century*, *Proceedings of the British Academy*, lxi (1975), 337-71.
- 9) 以下資料番号 (たとえば 8°) でページ数に変える。
- 10) Terlizzi, op. cit., p. 4.
- 11) id., p. 132.
- 12) id., p. 27.
- 13) id., p. 36.
- 14) マキアヴェルリ, *フィレンツェ史*, 大岩訳, 東京 昭和29年, pp. 115-7 他。
- 15) Villani, op. cit., Lib. VI, Cap. LIII, p. 77. “per onore del comune” と記されている。
- 16) id., Lib. VI, Cap. LXIX, p. 96.
- 17) C. T. Davis, *Il Buon Tempo Antico*, in “*Florentine Studies*”, London 1968, pp. 45-69.
- 18) Y. Renouard, Tr. da G. Tarizzo, *Gli uomini d’Affari italiani del Medioevo*, Milano 1973 (L. A. Colin 1968), pp. 202-3.
- 19) 前章の註5) 参照。
- 20) Jordan, op. cit., p. 345.
- 21) S. Ravaggi e altri, *Ghibellini, Guelfi e Popolo Grasso*, Firenze 1978, p. 15.
- 22) Villani, op. cit., Lib. VII, Cap. IX, p. 152.
- 23) É. G. Léonard, trad. d. R. Liguori, *Gli Angioini di Napoli*, Varese 1967 (*Presse Universitaires de France* 1954), p. 60.
- 24) Housley, op. cit., p. 240. 同銀行は, 1298年に倒産する。
- 25) Jordan, op. cit., p. 545.
- 26) id., pp. 549-555.
- 27) Housley, op. cit., pp. 226-7.
- 28) id., p. 227.
- 29) Terlizzi, op. cit., p. 505.
- 30) id., pp. 234-5.
- 31) id., *ヴォルテッラ*は pp. 123-5, *シエナ*は, p. 280 と p. 316, *ルッカ*は p. 321.
- 32) id., p. 422.
- 33) 825°(1283年2月25日)以降, 捕虜となる前の 880°(1284年5月19日)まで, 少数の例外を除いて, Carlo II が実務を担当している。
- 34) id., p. 535.
- 35) id., p. 190.

第 二 章

- 1) 拙稿, 中世フィレンツェの知的生産性飛躍の時期と契機, 大阪外大学報69号 (1985) 所収, pp. 57-77.
- 2) M. D. Nenci, *Ricerche sull’immigrazione dal contado alla città di Firenze nella seconda metà del XIII secolo*, in “*Studi e Ricerche*” I, Firenze 1981, p. 152.
- 3) H. Hoshino, *L’Arte della lana in Firenze nel basso medioevo*, Firenze 1980, p. 133.
- 4) id., p. 50.
- 5) A cura di A. Schiaffini, *Testi fiorentini del Duecento e dei primi Trecento*, Firenze 1954 (Ristampa).

- 6) A cura di A. Castellani, Nuovi testi fiorentini del Duecento, Firenze 1952.
- 7) A. M. N. Patrone, Uomini d'affari fiorentini in Tirolo nei sec. XIII e XIV, in "A. S. I.", Firenze 1963, p. 170.
- 8) A. Saponi, La compagnia dei Frescobaldi in Inghilterra, Firenze 1947, p. 5.
- 9) Villani, op. cit., Lib. VII, Cap. LIII, p. 226.
- 10) R. Davidsohn, Storia di Firenze, Vol. VI, Firenze 1977, p. 73.
- 11) A. Saponi, Storia Interna della Compagnia Peruzzi, in "Studi di Storia Economica" Vol. II, Firenze 1982, Parte III, XXIII, p. 655.
- 12) id., La famiglia e le compagnie degli Alberti del Giudice, in "Studi di Storia Economica", op. cit., p. 1047.
- 13) id., p. 985.
- 14) id., Le compagnie e bancarie dei Gianfigliuzzi, in "Studi di Storia Economica", op. cit., pp. 943-4.
- 15) E. Fiumi, Fioritura e decadenza dell' economia fiorentina, Parte I, in "A. S. I.", Firenze 1957.
- 16) id., p. 406.
- 17) id., p. 407.
- 18) id., p. 414.
- 19) 引用は二文共, id., p. 390.
- 20) id.
- 21) B. Quilici, La chiesa di Firenze dal governo del "Primo Popolo" alla restaurazione guelfa, in "A. S. I.", Firenze 1969, Disp. III (pp. 265-337), e Disp. IV (pp. 423-460).
- 22) id., p. 323.
- 23) id., pp. 326-8.
- 24) id., p. 328.
- 25) Villani, op. cit., Lib. VI, Cap. LXV, p. 93.
- 26) id.
- 27) R. Davidsohn, Forschungen zur Geschichte von Florenz, Vierter Teil, Berlin 1908, pp. 426-440.
- 28) Davidsohn, Storia di Firenze, op. cit., Vol. III, Firenze 1981, p. 386.
- 29) D. Herlihy et C. Klapisch-Zuber, Une etude du catasto florentin de 1427, Paris, 1978. p. 159, Tableau 11.
- 30) 総数112, 教会数586に対して19, 11%, トスカーナ平均は, 2040に対する196 (10.43%) と約2倍で, 他のコムーネに比しても, 抜群に多い。
- 31) 『デカメロン』第三日第四話には, こうした団体の熱心な信心家が修道院長に欺されて妻を盗まれる話が出ている。
- 32) その代表的な作者として Bono Giamboni, Francesco da Barberino, Jacopo Passavanti 等々を挙げることができよう。
- 33) Davidsohn, op. cit., Vol. II, pp. 535-696.
- 34) A cura di C. Paoli, Il libro di Montapeti (Documenti di Storia Italiana, tomo IX), Firenze 1889.
- 35) id., p. 370.
- 36) Davidsohn, op. cit., p. 555.
- 37) id., p. 556.
- 38) Villani, op. cit., Lib. VI, Cap. LXXVIII, p. 111.
- 39) id., Cap. LXXIX, p. 113.
- 40) id., Cap. LXXXV, p. 123.
- 41) Davidsohn, op. cit., p. 837.
- 42) id., Vol. III, p. 224. 1280年, Latino 枢機卿の指導下で, 'Conservator pacis' のタイトルと共に復活する。
- 43) id., Vol. II, p. 848.
- 44) id., p. 855.

- 45) Villani, op. cit., Lib. VII, Cap. LXIV, p. 246.
- 46) id., Cap. CXXX.
- 47) Terlizzi, op. cit., p. 296.
- 48) L. Naldini, La "Tallia Militum Secretatis Tallie Tuscie" nella seconda metà del secol XIII, in "A. S. I.", Firenze 1920, pp. 75-113.
- 49) id., p. 111.
- 50) C. Bastioni, La battaglia di Colle, Colle 1970.
- 51) D. Waley, The Army of the Florentine Republic from the Twelfth to the Fourteenth Century, in "Florentine Studies", London 1968, pp. 70-108.
- 52) id., p. 107.
- 53) id., p. 108.
- 54) P. Pieri, Alcune quistioni sopra la fanteria in Italia nel periodo comunale, in "Rivista Storica Italiana", Torino 1933, p. 598.
- 55) Naldini, op. cit., p. 90.
- 56) Villani, op. cit., Lib. VII, Cap. CXXX, pp. 332. この時100騎のフランス騎士を援軍に得ており、指揮官の補佐役 messer Guiglielmo Berardi は戦死 (p. 337) している。
- 57) id., Cap. CXXXI, p. 335.
- 58) id., p. 334.
- 59) N. Rubinstein, The beginnings of political thought in Florence, in "Journal of the Warburg and Courtauld Institutes", Vol. V, 1942, p. 214 および n. 1.
- 60) Davidsohn, Forschungen, op. cit., Vierter Teil, pp. 557-577.

結 論

- 1) Terlizzi の資料集の中には、フィオーリーノ金貨が利用されている例は意外に少ない。若干の誤りがあるかも知れないが、各資料に用いられている貨幣の頻度を数えると以下の通りである。但し紙数が限られているので、単独で出てくるケースのみ示す。① once d'oro 154, ② lire tornesi 16, ③ lire pisane 13, ④ fiorini d'oro 10, ⑤ lire fiorentine 9, ⑥ marche d'argento 5, ⑦ lire senesi 3, ⑧ lire coronatorum 3, ⑨ carlino d'oro 2 (この貨幣は当時未だ準備中)。以下略。
- 2) Nicola Ottokar, Il comune di Firenze alla fine del Dugento, Torino 1974, の後半は、ボボロの不満がマニャーティ攻撃に転化していく過程を見事に描写している。

(本論の資料蒐集に際して、ボローニャ大学の星野秀利先生に多大のご指導とご援助を受けたことを記し、感謝の意を表したい。)